The Kamenori Community

かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2012年11月 No.11

今号の内容

◇かめのり大学院留学　アジア奨学生
夏の研修交流会
◇国際交流事業助成
◇高校生短期交流プログラム
中国・韓国で異文化体験
◇第４回中学生交流プログラム
はじめての相互交流が実現
◇海外日本語教育サポート事業
JSフォーラム準備会議を実施

中学生交流プログラム　派遣団が台北市立介壽国民中学を訪問

かめのり大学院留学　アジア奨学生

夏の研修交流会

大学院奨学生６名が、９月上旬に長野県諏訪で行われた夏の研修交流会に参加しました。１日目の研究発表会では、ひとりずつ研究の内容、進捗状況を発表。それぞれ研究分野が異なり、お互いの発表に興味・関心を持って耳を傾けていました。質疑応答では、奨学生間で研究の方向性や進め方について活発な意見交換が行われ、今後に大変役に立つアドバイスがでて、意義のある発表会となりました。２日目は、諏訪湖時の科学館　儀象堂にて、文字盤に針を取り付ける作業を中心とした腕時計作りに挑戦。想像以上の細かい作業に悪戦苦闘しましたが、丁寧なご指導のもと無事に完成。そして、いにしえの歴史情緒が息づく諏訪大社下社周辺を散策した後、諏訪湖を一周する船に乗り、湖から町を眺めながら、和やかなひと時を過ごしました。忙しい研究の日々から少し離れ、楽しく有意義な時間をともに過ごしたことで、奨学生同士の仲も深まりました。

上：研究発表会
下：腕時計が完成！

かめのりコミュニティ

国際交流事業助成

2012 年度は、次の事業への助成が決定し、7 月に交付式を行いました。交付式では、IIHOE［人と組織と地球のための国際研究所］代表の川北秀人氏による助成金を受けるにあたってのワークショップのほか、昨年度の助成事業の報告会と懇親会も併せて行いました。懇親会では、情報や意見交換をして、団体同士の交流の機会を持つことができました。

（敬称略）

〈一般公募〉2012 年度　助成事業一覧

一般財団法人世界こども財団
ブータン留学生と日本の子どもたちの交流事業

特定非営利活動法人学割 net
留学生との国際交流サマーキャンプによる
小学生の心のケア事業

慶應義塾大学医学部 日中医学生交流協会
日中医学生交流協会　第28次派遣団

日中交流学生団体　京英会
日中相互訪問プロジェクト 2012 ～現地語でつなぐ絆～

満州分村江川崎開拓団遺族会
旧西土佐村・満州分村の歴史を語り継ぐ写真展

モンゴルの歴史と文化研究会
第 1 回日本モンゴル青年フォーラム
「新世紀をむかえた日本とモンゴル」

【事業報告】 本年度助成事業から次の団体の報告を紹介します。

慶應義塾大学医学部　日中医学生交流協会第 28 次派遣団

当団体は中国の医学生との交流を基軸とし、日本の漢方医学の原型である中医学を学ぶためのプログラムを行っています。28 回目の派遣となる今年は、8 月の夏季休暇を利用して中国北京、成都、九寨溝、台湾台中へ 8 名の団員で 11 泊 12 日の短期研修を実施しました。北京では北京大学医学部の複数の附属病院での西洋医学や中医学またはそれらの結合医学といったものを見学し、学生との間でディスカッションを行いました。成都では中国四大生薬市場の一つを訪問し、成都中医薬大学での中医学の臨床現場を視察して参りました。また、九寨溝・黄龍も訪ね、世界自然遺産に認定されている広大な風景区を散策しました。そして台中では中国医薬大学の中医学科の学生達と共に中医学について英語で講義を受け、理解を深め、病院での診療の見学をしました。

日本の他に中国と台湾という東アジアを代表する国々での医療の実情や医学教育の現状というものに触れ、刺激的な日々を送ることができました。さらに、温かく迎え入れてくれた多くの人々との出会いを通じて、文化や国民性の違いなどメディアでは報じられないナマの中国を感じ、新たな側面を垣間見ることができました。これを機に、私たち若い世代が少しでも日中の距離を縮めていくことで架け橋になっていきたいと強く心に感じました。

この経験を糧に、将来にわたり日本の医療や医学教育に貢献し、日本という国をより良い国にするべく今後も精進していくつもりです。

報告：日中医学生交流協会第 28 次派遣団
団長　宗　松男　氏

上：北京大学人民病院にて、中医学の先生による針・吸い玉治療の現場

鑑真像の前で北京大学生と一緒に

台中の観光名所、日月潭

高校生短期交流プログラム

中国・韓国で異文化体験

7月から8月にかけて約1ヵ月間、中国、韓国にそれぞれ5名の派遣生が訪問。言語の学習のほかに、中国では、オペラマスクやシルクフラワーなどの伝統工芸品作りを体験。他国からの留学生と万里の長城も訪れ、その壮大さに言葉にならないほどの感動を覚えました。

韓国では、滞在後半には現地の高校へ通い、先生や同世代の友だちに笑顔で迎えてもらいました。たくさんの友だちができ、人との出会いの大切さを知りました。

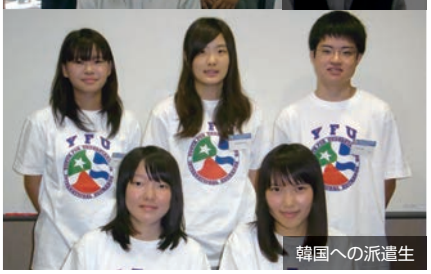
〈派遣生のことば〉体験レポートより

「今回発見した韓国の良いところは、愛国心があり仲間をとても大切にすること。これは、観光では知りえない現地の生活を通してわかることで、本当の韓国を知ることができた」

「毎日変化する中国での生活は、とても新鮮で、机に向かうだけでは決して得られない経験と、広い視野を与えてくれた」

「通学した高校で、これまで日本によい印象を持っていなかった人が、私を通じて興味を持つようになり、日本語の勉強を始めた姿を見て、意義のある交流ができたと思う」

中国への派遣生


韓国への派遣生

The Kamenori Community
2012年11月 No.11

第４回 中学生交流プログラム

初めての相互交流が実現

第４回目の中学生交流プログラムは実施団体である（一社）国際フレンドシップ協会（IFA）のご提案で、東日本大震災の際の多大な支援への感謝の意を伝えようと「台湾」に決定。こうして「台湾」との初めての交流、そして初めての招へいが実現しました。IFA はもちろん、企画当初より台北駐日経済文化代表処及び（公財）交流協会がご協力くださり、心から感謝申し上げます。

日本の派遣団は本年９月30日～10月７日、台湾からの招へい団は11月11日～19日の間、日台間の交流を深めました。

派遣団は山本伸団長率いる７人の団員が、台北、台南、高雄を訪問し、高雄師範大学では日本文化紹介を、同附属中学では音楽と理科の授業に参加し、ウクレレの合奏をして現地中学生と交流しました。台北市立介壽国民中学では大歓迎を受け、授業見学や参加のほか日本文化紹介や招へい予定の生徒宅でのホームステイで生活体験をしました。台湾立法院への表敬訪問や故宮博物館、台湾医科大学を訪問し、自分たちの目で台湾の社会・文化を学びました。何より、団員たちは同年代の中学生の英語力に驚き、それに加え日本語も話せることに刺激をたくさん受けました。

招へい団は頼（Joyce Lai）先生引率の８名が来日しました。オリエンテーション中、団員が学校訪問での携帯電話持ち込み禁止に驚く一方、先生は良い規則と評価し、IFA の及川事務局長ならびに語り継ぐ日本の心の横山総三代表から日本人の生活習慣や精神性について英語で講義を受けました。その後、台北駐日経済文化代表処の沈代表との懇談やお茶の水女子大学附属中学校および荒川区立原中学校に訪問し、授業参観や日本の中学生との交流を楽しみました。11月13日の歓迎交流会では、招へい事業の協力者の方々と歓談し、台湾コマ回し、伝統楽器の演奏と剣舞、台湾茶道の文化紹介を行いました。加えて、派遣団と招へい団の再会と交流が、今回のハイライトでした。その後、京都では金閣寺や二条城を訪問し、着付けや茶道体験など日本の文化を学び、ホームステイをして無事帰国。

短期間ながら中学生がアジアを訪問することで、自らの五感でその国に触れ、自国との違いを発見し、その国の人々と言葉を超えて親しくなり理解し合い、そして、アジアの同年代の仲間の優秀さに刺激を受けて、より学業に励むようになること、これがこのプログラムの醍醐味となりました。

報告：理事・事務局長　西田浩子

（派遣団） 左：台北市で夜市へ ／ 右：台北市立介壽国民中学で茶道を披露

（招へい団） 左：歓迎交流会で台湾の伝統楽器演奏と剣舞を披露／右：京都訪問 着付体験

第２回からプログラムの団長（引率）を務めていただいている山本伸氏（四日市大学 教授）より感想をお寄せいただきました。

「プログラムを終えて」

台北市立介壽国民中学林校長と山本先生（左）

インターネットが当たり前になった現在、キーワードで検索さえすれば世界中の異文化にすぐ手が届きます。どこにどういう民族がいて、どのような文化があるのか。知識として異文化を知るのはとてもたやすい時代になりました。ところが逆に、異文化をあえて体験しようとしない傾向はむしろ強くなっています。しかし、真の異文化理解には現場に踏み込み、現地の人と語り、ご当地の食を口にするというプロセスは不可欠。それなくして異文化を理解するのは、まさに絵に描いた餅の味を探るようなものです。かめのり財団の「中学生交流プログラム」は、このプロセスを中学生という感性豊かな時期に経験させてくれる大変有意義なプログラムです。経済不況を理由に多くの組織がこの方面の予算を打ち切るなか、交流事業の継続は立派の一語に尽きます。

このプログラムの特徴の一つは大切な隣人であるアジア諸国を回ること。中国を皮切りに、韓国、マレーシアときて、第四回の今回は台湾が交流の舞台でした。折しも尖閣問題の嵐が吹き荒れるなかの台湾訪問に中学生たちはさぞ不安だったことでしょうが、いざ行ってみるとそんなことはどこ吹く風。最初から最後まで、台湾の人びとの優しさと温かさばかりが目立つ交流プログラムとなりました。ある方が流ちょうな日本語で笑いながらおっしゃいました。「私たち台湾は日本より20年遅れています。だから思いやりが薄れるのも20年遅い」。この言葉の意味を肌で感じた中学生たちは、おそらくその感覚を自分の言葉で周囲に伝え広めていくことでしょう。異文化理解においては、人と人、文化と文化の、顔が見え、匂い漂う交流を通して得られるこの感覚こそがものを言うということを無意識に感じながら。

海外日本語教育サポート事業

JSフォーラム準備会議を実施

21世紀のグローバル社会に生きる私たちはお互いの言葉と文化を学ぶことを通じて相互理解を深め多様性を認め合いながら協働していくことが求められています。この度、かめのり財団は海外日本語教育サポート基金を設立し、日本語を架け橋とした若い世代間の相互理解の促進とネットワーク作りに貢献する事業を実施します。その一つが国際交流基金と共催で実施するJSフォーラム（日本語人フォーラム･Japanese Speakers' Forum）です。

JSフォーラムは、21世紀を担う若い世代の相互理解の促進とグローバル人材の育成、教師間の交流と新たな外国語教育のアプローチの共有化、学習者間・教師間のネットワークの形成の三つを事業目標としています。2013年度から学習者（中高校生）も参加しての本会議の実施となりますが、その準備会議として、今年度は参加国となる国々の指導的立場の教師を招へいし、本会議で実施する学習活動を体験してもらい、討議をしながら交流を核としたプログラム案を作成しました。参加国はタイ、マレーシア、インドネシア、ベトナム、フィリピンの５か国。各国から２名の教師と国際交流基金現地事務所の日本語専任講師１名が参加しました。日本からも国際理解教育に携わっている高校の教師２名が参加し、教師間の活発な交流が図られました。講師は、多様な教師研修を実施されてきたカリフォルニア大学サンディエゴ校教授の當作靖彦先生と、学習者と教師が共に参加するワークショップを長年開発及び実施されてきた西オーストラリア州教育省日本語アドバイザーの藤光由子先生にお願いしました。元日本語教師で俳優の宇佐美慎吾氏も参加し、藤光先生と協働のインパクトのある研修が行われました。

10月14日～21日まで、埼玉県北浦和の国際交流基金日本語国際センターで開催された準備会議のテーマは「お弁当」。新たなアプローチであるプロジェクト型学習を実際に体験し、東京でお弁当に関する市場調査を行ったり、学習者の立場になりながらの研修は多くのアイディアを参加者に与えました。会議後半では2013年本会議のプログラムへの提案が討議され、活発な意見交換がありました。

今回の会議では、参加者の個としてのネットワークに留まらず、国と国を繋ぐ面としてのネットワークが形成されたという大きな成果がありました。今後はそのネットワークを生かして、学習者である中高校生が参加する本会議に向けての準備を進めていきます。

報告：理事・事務局長　西田　浩子

上：プロジェクト型学習　テーマはお弁当
下：和やかな雰囲気の研修

上：東京での市場調査
下：當作先生との学習体験の振り返り

今後の予定

12月	第６回かめのり賞　選考結果発表
2013年1月	かめのりフォーラム2013（第６回かめのり賞表彰式）開催
	【高校生短期】第５期生韓国・中国から来日
１月～２月	【高校生長期】第６期生受入生帰国

王敏理事 講演会開催予定

12月	神奈川県立横浜翠嵐高等学校定時制
2013年1月	四国高等学校国際教育生徒研究発表大会
2月	西日本日中文化教育交流協会

≪ 編集後記 ≫

中国、韓国に滞在した高校生のレポートから、ホストファミリーや現地のスタッフ、同世代の方に歓迎を受け、親切にしていただいた様子が強く伝わってきました。貴重な体験を通して得た隣国の家族、友だちは一生の財産になります。心から歓迎してくれた現地の方々に感謝するとともに、高校生たちが草の根の民間外交官としてこの経験を大いに生かしてくれることを期待します。（菊地）

発行人 ／ 西田　浩子
編集 ／ 菊地　佐智子
デザイン／イワブチサトシ（BUTI design）
印刷 ／ 佐伯印刷株式会社

日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！
公益財団法人 かめのり財団　The Kamenori Foundation
〒102－0083　東京都千代田区麹町 5-5　共立麹町ビル 103
TEL：03-3234-1694　FAX：03-3234-1603
E-mail：info@kamenori.jp　URL：http://www.kamenori.jp/